

## まえがき

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	アジ研選書
シリーズ番号	44
雑誌名	アジアの航空貨物輸送と空港
ページ	i-ii
発行年	2017
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00049332">http://doi.org/10.20561/00049332</a>

## まえがき

本書は、アジア経済研究所が2014年度から2年間かけて実施した「アジアにおける航空貨物と空港」研究会（主査・池上寛）の成果である。日本貿易振興機構アジア経済研究所では、国際物流に関する研究として、2007年に『東アジア物流新時代—グローバル化への対応と課題—』（アジ研選書No.8）と2013年に『アジアにおける海上輸送と中韓台の港湾』（アジ研選書No.35）を上梓した。本書は、これらの成果につづくものである。

これらを出版してからもすでに10年、4年が過ぎ、国際物流は世界経済がますますグローバル化するなかで、大きく変化してきた。そのような状況下で航空貨物に焦点を当てたのが本書である。航空機での輸送はヒトの移動に大きな役割を果たしているが、モノの移動でも近年その役割は大きくなりつつある。そのような現状認識のなか、アジアにおける航空貨物と輸送の起点となる空港がどのような状況にあるのかを本書では考えている。また、ASEAN共同体のうち、2015年12月31日にはASEAN経済共同体（ASEAN Economic Community：AEC）が発足した。この発足によって、ASEAN域内だけではなく、アジア域内すべてにおいて今後さらに域内貿易は発展し、その貿易を支える国際物流の役割はますます大きくなっていくであろう。その意味において、国際物流の一端を担う航空貨物に焦点を当てた本書は、各国・地域の航空貨物輸送や空港を知るうえで役立つものであると信じている。

本書は序章と8つの章から構成されている。本書では、国際航空貨物取扱量で上位10国際空港を擁するアジアの国・地域をとりあげるとともに、ASEAN単一航空市場およびインテグレーターと呼ばれる国際航空物流企業のアジア戦略についても検討している。詳細の議論は各章を読んでいただきたい。

最後に、研究会では多くの方の協力によって成り立っている。講師としてお呼びした玉城恒美（沖縄県）、河田敦弥（国土交通省）、菅原淳子（電気通

信大学), 嶋崎聡 (株式会社 ANA Cargo), 田中元樹 (ヤマト運輸株式会社), 小倉重夫 (成田国際空港株式会社), 竹林幹雄 (神戸大学大学院), 瀧本哲也 (株式会社南海エクスプレス), 辻久子 (公益財団法人環日本海経済研究所), 木下達雄 (キノシタ・エビエーション・コンサルタンツ), 渡辺均 (日本貨物航空株式会社) の各氏からは, 非常に参考になる報告を聞くことができた (所属先は報告時のもの)。また, 園山玲子氏 (インターモダル株式会社) が主宰する「ネットワークの会」にも参加させていただき, この研究会の概要や委員からの報告をさせていただいた。この会には航空貨物に従事している方々が参加され, そこでいただいた話やコメントは研究会を実施するうえで大いに役に立った。さらに, 成田国際空港には研究会メンバー全員が, 関西国際空港や那覇空港には一部の研究会メンバーが見学する機会を得ることができた。空港はセキュリティの関係で制限区域が設定されており, 簡単に見学できない場所も多い。そのため, 実際に航空貨物が取り扱われている区域を見学できたことは非常に貴重な経験でもあった。

研究会メンバーは担当国・地域を中心に現地調査を実施し, その成果を本書に取り込んでいる。現地調査を遂行するにあたっては, さまざまな方の協力なくしてはなし得なかった。また, 本書の出版の可否を決定する過程では, 検討者から有益なコメントを受けた。このコメントなしでは, 読者は本書の内容をより深く理解することはできなかったかもしれない。さらに, 研究支援部出版企画編集課の井村進と石田静香の両氏にはこの本の出版のために労をいとわずご協力をいただいた。そして, 表紙には成田国際空港株式会社からのご厚意で航空貨物地区の画像を提供していただいた。

これらの方々から頂戴したご支援とご協力に対して深く感謝を申し上げたい。そして, 本書がアジアの航空貨物輸送やそれを担う空港の現状を知る一助になれば, 幸いである。

2016年12月・台北にて  
編者